



谷底の店

救いようのないほどに交通の便が悪く、

交通手段は車のみ

朝起きると、外は雨だった。

いつも通り、職場へ行く。

俺は支度をして、玄関から二階へと続く吹き抜けの階段の端っこに置いた車のキーを手を取った。

口には昨晚コンビニで買っておいたバランス栄養食品のクッキーが挟まれている。

俺は現在29歳のフリーター男だ。

まだ結婚もしていない。

独身で、のんびり生きている男だ。

ジョギングとゲームが趣味だったりする。

それにしても、なんてところに俺は働いているのだろう。

俺の住む郊外から車で更に地方へ3時間。

俺が働きに出ているのは、ド田舎の村の谷底にある店だ。

水滴を延々と除去し続けるワイパー。

次第に周囲は寂れた田舎へと突入していく。

道路の外壁が低くなり、田園風景が広がっていく。

ハンドルを握る手も、慣れたものだ。

バタンッ！！

車のドアを閉める。

少し高台になっているところに建てられた職場の店に到着した。

周囲は山。

店横の駐車場に停車した後、店内に入り俺はいつものように事務所でタイ

ムカードを押す。

「おはようございますっ」

事務所に入ると、支配人と運営室のチーフがいつものように返してくれる。

「おはようっ」

この店はとても平和だ。

ギスギスした人間関係の軋轢も、厳しい縦社会的関係性もない。

まるで店を取り囲む穏やかな緑を象徴しているかのようだ。

この店には、この田舎の山や田畑で取れた特産物が売っている他、一般のコンビニにあるような必須品やファストフードも小さな棚に並べられている。

更にフードコートではそばやうどん、そして簡単な定食が食べられる。

これといった取り柄もない店だが、環境面では都会の店に負けないものを持っている。店が建てられた小さな丘は、一面が手入れの行き届いた芝生で敷き詰められており、眺めも最高だ。

しかし、店の周囲には過疎化した集落が点在しているだけ。

都市からはかなりの距離がある。

客が入るのか??

この店が存続しているのには、ただ一つだけの理由が存在した。

それは……。

体験版はここまでです。

もし内容を気に入っていただけましたら、

続きを製品版でお楽しみいただけますと光栄です。